

# 高等教育進学者における学習経験の同質性と多様性 —— 関西と北陸の文科系学生を対象とする調査結果の探索的分析 ——

大 前 敦 巳\*

(平成15年4月30日受付；平成15年6月19日受理)

## 要 旨

小論は、関西と北陸の7大学・短大の学生を対象に実施した質問紙調査の結果に基づいて、日本の高等教育進学者における学習経験の意味体系を探索する。すべての大学・短大の学生において、家庭教育の経験が相対的に乏しく、小学生時に習いごとに通い、中学生時以降に塾や予備校に通うという、共通した主要な学習経験のパターンがあることが明らかになった。そのような同質的な学習経験が共有される中で、設置者別、地域別、社会階層別にみると、主に周辺層の学生において多様なバリエーションが観察される。この社会的軌道の違いからなる関係性は、身体化され持続する文化的性向としてのハビトゥスを構成する、日本の学生生活条件の問題として理解することができる。

## KEY WORDS

|                      |       |                         |       |
|----------------------|-------|-------------------------|-------|
| learning experiences | 学習経験  | system of signification | 意味体系  |
| homogeneity          | 同質性   | social trajectory       | 社会的軌道 |
| habitus              | ハビトゥス |                         |       |

## 1. 日本の文科系高等教育をめぐる諸問題

小論の目的は、高等教育進学者における学習経歴と学生生活との関わりについて、2002年1月に上越教育大学で、2～3月にフランスの2大学で行った予備調査に続いて（大前，2002），関西と北陸の7大学・短大で実施した質問紙調査の分析結果を報告することである。上越教育大学の結果においては、フランスのケースとは異なり、進学ルートにおいても、過去の学習経歴においても同質性が高く、そうした同質的な学習経験を共有する学生が、多数派のメインストリームを構成していることを明らかにした。そして、その対極には、多様化した周辺層の学生が存在するという関係性が見出され、それはフランスの学生とは異なる形で、一種独特の意味体系を作り出している可能性があることを指摘した。以下の分析では、上越教育大学生に見られたのと同様の結果が、日本の他大学・短大の学生にもあてはまるのかを確認することが主要な課題となる。

ただし、分析においては、文科系の高等教育に範囲を限定した上で議論を進めることにした。文科系に限定するのは、極めて多岐にわたる高等教育の全体を一挙に論じることが困難であることに加えて、「文化資本」の獲得面において、文科系高等教育は常に先導的な役割を果た

---

\* 生徒指導総合講座

してきたと考えられるからである。この概念を考案した P. ブルデューらのフランスにおける研究の出発点は、1950～60年代の文学部学生に見られたディレッタントな「遺産相続者たち」の卓越した文化的慣習行動である（ブルデュー・パスロン、1964＝1997）。今日ではフランスでも高等教育のマス化が浸透して、そのような学生はごく少数しか見られなくなったが、学部・学科間の文化的行動の違いが顕著なことは全国調査からも明らかにされている（Grignon, 2000：353-381）。他方、日本においても、戦前来の「国家ノ須要」に応える実学偏重の中で、小人数の研究室を単位とする教授－学生関係を通じて一種独特の文人的エートスが形成され（橋本、1996）、旧制高等学校の学生文化においては、文芸部・運動部・弁論部という対立関係の中から、武士のエートスとは異なる教養主義が醸成されていった（竹内、1999、第4章）。

伝統的に「哲・史・文」と呼び慣わされてきた文学部の変容についても、橋本（1997）は、今日における人文系学部の種類は多様化しており、学科名称も多岐にわたっているが、高等教育全体に占める学生比率は15％程度の低い比率のまま推移していることを示している。その比率は特に国立大学で低く、女子学生が多く入学する私立大学が主な担い手になっているものの、近年では女性の進学率上昇に伴って、人文系学部に進学先が集中する傾向は弱まっている。

また、保田（2002）は、京都大学の1年次生を対象に行った質問紙調査の結果から、学部間の違いとして、「純粋学部」（総合人間・文・教育・理）と「実用学部」（法・経済・医・薬・工・農）の間で、学生の文化志向性が異なることを明らかにした。「純粋学部」のなかでも文学部においては、最も教養（主義）的な傾向が見出されたが、自己目的としての審美志向というよりは「差異化型」の側面が強く、文学部においても人文的教養が危機に晒されていることを指摘している。

しかし、日本における高等教育の特徴として、天野（1986）が歴史的発展過程を辿る中で明らかにしているように、近代以前に成立した学部や学科の集合体が、国家の強力なコントロールの下で同型繁殖的に拡大した西欧の大学とは異なる構造的特質を持っていることが挙げられる。つまり、西欧モデルの移入によって遅れて急速に拡大発展した日本の高等教育は、国家による統制が部分的で不均衡なものにとどまり、戦前における大学と専門学校の2層、官学と私学の2セクターが、質的な格差を有しながら量的には伯仲した比重をもつという構造が形成された。そのため、今日においても学部・学科間の違い以上に、①国立／公立／私立からなる設置者の違い、②中央／地方の関係からなる地域性の違い、③旧帝国大学を頂点とする階層的構造をもった大学間の格差が、日本の高等教育を論じる上で重要な意味を帯びることになる。

そのような日本型高等教育の特徴は、文部（科学）省が隔年に実施している「学生生活調査」の調査分析枠組にも反映しており、私立医歯薬系学部のような高額の学費を徴収するようなケースを除けば、学部・学科間の違いよりは、設置者（国立・公立・私立）、地域（東京都・京阪神・その他）、学校種別（短大・大学・大学院、昼間・夜間）による区別が、主要な結果分析項目として用いられている。また、大学間における学生文化の差異に関しては、岩田（1999）が、設置者と所在地ごとに抽出した大学・短大の学生を対象とする質問紙調査の結果に基づいて、高校時代の生活態度とカレッジ・インパクトの効果から、個別大学ごとに独自の学生文化が形成されていく様態を分析している。4年生大学においては、入学当初の大学偏差値が、各大学で優勢な学生文化に影響を与えるわけではなく、大学入学後の活動が各大学の学生文化の基盤になっていることを明らかにしている。

小論の分析においても、上記のような日本の高等教育に特有の分類を考慮に入れたサンプル

構成からなる調査データを使用することにより、文科系に限定した範囲における学生の学習経験がもつ意味体系を探索することにした。

## 2. 方 法

上記の観点に基づいて、上越教育大学での予備調査に続く本調査では、2002年5月末から7月初旬にかけて、関西と北陸の7大学・短大の学生を対象とする質問紙調査（「現代大学・短大生の学習経歴と学生生活に関する調査」）を実施した。調査対象校は、設置者（国公立と私立）、地域（関西と北陸）、最も競争的（selective）か否かという基準によって分類した次の7つのタイプから、各1校を抽出した。調査したクラスはすべて1・2年次生対象の文科系科目であるが、大学によっては、他学部や3年次生以上の学生も含む「全学共通科目」であった。そこで、以下の分析では「文科系」と呼ぶ場合、できる限り多くのサンプル数を確保するために、狭義の文学・人文社会系に加えて、総合科学系、芸術文化系、教育系（教員養成系を除く）も含めた広義の意味を採ることにした。

調査方法は、いずれの大学・短大においても、1・2年次生を対象とする文科系クラスの授業時間の一部をお借りした集合調査法によりデータ収集を行った。回答は無記名で、学生自身の過去の学習経験、現在の学習生活、余暇活動、アルバイトと生活状況、将来についての意識など、学生生活の文化的・経済的条件に関する質問に回答していただいた。その概要は表1の通りである。

表1 質問紙調査のサンプル構成一覧

| 対 象 校          | 実施時期     | 回答サンプル数 | 分析サンプル数 |
|----------------|----------|---------|---------|
| 関西の最も競争的な国公立大学 | 2002.6   | 309     | 73      |
| 関西の最も競争的な私立大学  | 2002.6   | 272     | 194     |
| 関西の国公立大学       | 2002.7   | 147     | 121     |
| 関西の私立大学        | 2002.6   | 188     | 174     |
| 北陸の国公立大学       | 2002.7   | 375     | 263     |
| 北陸の私立大学        | 2002.6   | 204     | 151     |
| 関西の私立短期大学      | 2002.5～6 | 682     | 682     |
| 合計             | 2002.5～7 | 2176    | 1658    |

分析に入る前に、各調査対象校における学生の基本属性に関するプロフィールを記しておきたい。関西の最も競争的な国公立大学（以下「関西国公立S」とする）では、「文科系」の対象校の中でも唯一男性が過半数を占め（70%）、出生地および高校卒業時の居住地は近畿地方出身が約半数にとどまり、関東地方（約15%）をはじめ東海・中国・四国・九州など広範囲の地域から学生を集めている。出身高校は、公立学校の比率が高くなく（52%）、高校卒業時の学業成績は「良かった」と答えた者が49%を占める。入学試験はほとんどが一般入試を通過しており、他に入学したかったができなかった学校があったと答えた者は少ないが（11%＝他校入学志願率と呼ぶ）、浪人経験率が32%と高くなっている。父親の「専門職」比率は32%、母親の「大学・大学院」学歴比率は58%であり、恵まれた家庭の出自である者が多い。

関西の最も競争的な私立大学（以下「関西私立S」とする）においては、性別は女性のほうが多いが（61%）、関西国公立Sと同様に、関西以外の広範な地域から学生を集めており（近畿地方出身は約6割）、出身高校も公立学校の比率が54%にとどまる。高校卒業時の学業成績は、30%が「良かった」と答えている。一般入試以外に推薦による入試を経た者が27%を占め、他校入学志願率は43%、浪人経験率は28%となっている。父親の「専門職」比率は24%、母親の「大学・大学院」学歴比率は33%となっている。

関西の国公立大学（以下「関西国公立」とする）は、女性の比率が60%を占めるが、約8割が近畿地方の出身者である。出身高校は公立学校の比率が高く（77%）、高校卒業時の学業成績が「良かった」と答えた者は21%である。入学試験はほとんどが一般入試で（98%）、他校入学志願率は49%、浪人経験率は30%である。父親の「専門職」比率は20%、母親の「大学・大学院」学歴比率は39%である。

関西の私立大学（以下「関西私立」とする）も、女性の比率がやや高いが（56%）、近畿地方出身者が約9割を占め、自宅通学者の比率も83%にのぼる。出身高校は公立学校の比率が71%で、高校卒業時の学業成績が「良かった」と答えた者は12%にとどまる。入学試験は推薦入試の比率が47%であり、他校入学志願率も70%にのぼるが、浪人経験率は10%と少ない。父親の「専門職」比率は22%であるが、母親の「大学・大学院」学歴比率は16%とやや低い。

北陸の国公立大学（以下「北陸国公立」とする）は、女性の比率が67%にのぼるが、北陸地方出身者は約35%にすぎず、東海地方（約2割）をはじめ、近畿、甲信越などの地域から学生が集まっている。出身高校は公立学校が92%を占め、高校卒業時の学業成績は23%が「良かった」と答えている。入学試験はほとんどが一般入試で、他校入学志願率は48%、浪人経験率は18%である。父親の「専門職」比率は29%、母親の「大学・大学院」学歴比率は25%である。

北陸の私立大学（以下「北陸私立」とする）においては、女性の比率が59%で、北陸地方出身者が約7割となっており、近隣の甲信越地域からも約1割の学生が集まっている。出身高校における公立学校の比率は73%で、高校卒業時の学業成績が「良かった」と答えた者は16%である。入学試験は推薦入試の比率が40%を占め、他校入学志願率は69%と高いが、浪人を経験した者は少ない（5%）。父親の「専門職」比率は12%、母親の「大学・大学院」学歴比率は15%であり、社会階層的にはあまり高くはない出自の学生が多い。

関西の私立短期大学（以下「関西私立短大」とする）は、女子短大であるために女性比率は100%であり、近畿地方出身者が約9割を占め、自宅通学者の比率も80%となっている。出身高校は公立学校の比率が70%で、高校成績時の学業成績が「良かった」と答えた者は14%である。入学試験は推薦入試の比率が86%ときわめて高いが、他校入学志願率は33%で比較的低く、浪人経験率はゼロに近い（2%）。父親の「専門職」比率は12%、母親の「大学・大学院」学歴比率も12%であり、調査対象校の中では最も低い値となっている。

### 3. 学習経験の同質性

以上にみた各対象校のプロフィールのように、同じ「文科系」でも設置者、地域、競争的か否かの違いによって、様々に異なる社会的特性を持つ学生が集まっていることが認められたが、彼・彼女たちの学習経験にはどのような差異が見られるのだろうか。

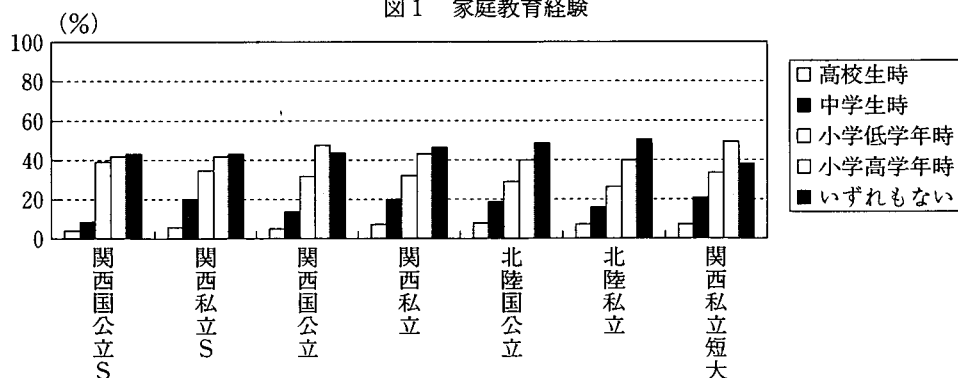
結論を先取りして述べれば、どの大学・短大においても類似した学習経験が共有されており、

それはしかも、上越教育大学の予備調査で観察されたものとはほぼ同じである。上越教育大学生においては、まず社会人学生や留学生はほとんどなく、出生年、高校学科(普通科)、少ない職業経験などの面において同質性が高いことが確認された。また、家庭教育の経験が相対的に乏しく、小学生時に習いごとに通い、中学生時以降に塾や予備校に通うという、共通した主要な学習経験のパターンがあることが明らかにされた。さらに、全般的に地域教育、ボランティア活動、海外滞在などの経験は少なく、大学・短大以外の教育を受ける「ダブルスクール」の学生も言われるほど多くないことが示された。

関西と北陸の7大学・短大の結果においても、出生年については各校とも9割以上が1982年以降生まれであり、ほぼ同一年齢層の者が学生集団を形成している。高校の学科についても、普通科高校以外に通った者は皆無に近く、北陸私立で5%の学生が総合制・単位制高校、3%が職業高校の出身であるのが最大である。外国出身の学生については、調査票とその説明が日本語でなされているため、調査の実施条件による過小評価が生じている可能性が高いものの、関西国公立Sの5.5%が最高で、関西私立Sと北陸国公立以外はゼロであった。職業経験については、私立大学・短大で数名見られる程度であり、国公立大学では皆無であった。これらのことから、大学入学にいたる進学ルートの面において、エリート・マス型の共通した特性が、どの大学・短大にも見られることが確認される。

小学生時から高校生時までの学習経験に関しても、学校間の差異よりも共通性のほうが際だっている。図1は、「あなたは次の時期に、家族から日常的に勉強を覚えてもらうことができましたか」の質問に対して、あったと答えた者の比率をグラフに表したものである。それを見ると、どの大学・短大とも4割前後の学生が「いずれもない」と答えており、家庭教育経験の比重の低さが浮き彫りにされる。関西国公立Sでは、小学生高学年時でも38%が家庭教育を受けているが、中学以降になると1割以下に低下するので、競争的な大学の学生においても家庭教育経験が決して豊富であるとは言えない。

図1 家庭教育経験



続いて、音楽などの習いごとをはじめとする文化活動と、スポーツ教室の経験について、同様にグラフに表したのが図2・3である。それを見ると、いずれの大学・短大においても、文化活動については小学生時に過半数の学生が経験しており、スポーツ教育の経験についても、文化活動ほどではないが小学生時に経験率が最も高くなる傾向がみられる。北陸私立では、他

校に比べてやや経験率が低く、北陸国公立と関西私立短大では中学生時以降も文化活動の経験率が高く、関西私立ではスポーツ教室で同じことが言える。そのような若干の違いは認められるが、家庭教育に比べて文化活動やスポーツ教室の経験が、特に小学生時に盛んになされるという特徴を読み取ることができる。

図2 文化活動経験

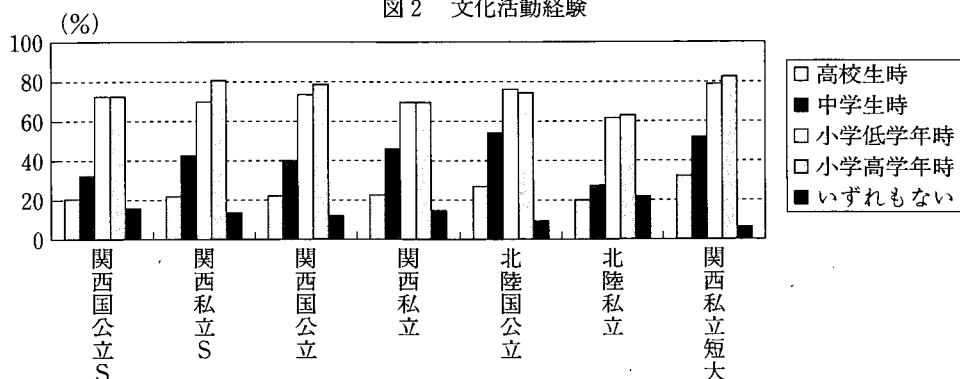
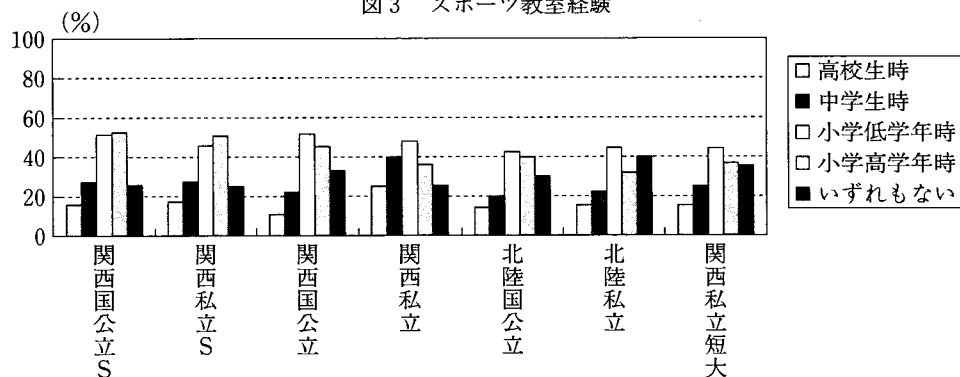


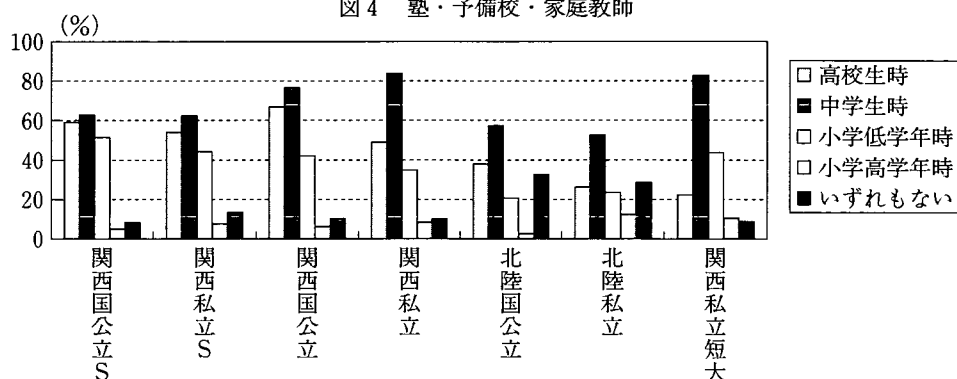
図3 スポーツ教室経験



中学生以降に経験率が高くなるのは、塾・予備校・家庭教師に通う経験である（図4）。関西私立と関西私立短大では、中学生時の経験率が80%を超えるが、それ以外の時期の比率はそれほど高くない。関西国公立 S、関西私立 S、関西国公立では、中学生時に加えて高校生時に6割前後、小学校高学年時に4割以上の経験率を示しており、長期にわたって塾通いをした経験をもつ学生が多いことをうかがわせる。他方、北陸国公立では33%、北陸私立では29%の学生が「いずれもない」と答えており、関西に比べて経験率の推移が緩やかに分布しており、塾通いに地域差があると考えられる（上越教育大学生でも27%が経験していない）。

このように塾・予備校・家庭教師の経験については学校間の違いが幾分見られるものの、上記の活動全体にわたる時期別の推移をみると、上越教育大学における予備調査結果とほぼ同様の傾向を各大学・短大が示していると解釈することができる。つまり、関西と北陸の「文科系」学生に着目するかぎり、学生の学習経験は同質的なものを共有しており、そのような同質性を持つ学生が主要な多数派を構成していると予測される。

図4 塾・予備校・家庭教師



そのほか調査票で質問した活動経験について見ておくと、①語学学校・英会話教室、②地域教育経験（地域の人々から児童館、公民館、図書館、学校のコミュニティルームなどで日常的に学んだこと）、③ボランティア活動（学校の授業で行われたものを除く）に関しては、いずれもすべての大学・短大において、6割以上の学生が「いずれもない」と答えている。語学学校・英会話教室は、小学校高学年時に最も多く通う傾向があるが（2割前後）、学校間の違いはあまり見られず、中学生時以降になると経験率は減少する。地域教育とボランティア活動は、私立大学・短大の学生のほうが多く経験する傾向が見られ、国公立大学では「いずれもない」と答える比率が8割近くに達する。これは一般入試を前にした受験勉強が関与していると推測され、その傾向が顕著に現れているのがアルバイトの経験であり、推薦入試で入学した学生の多い関西私立・北陸私立・関西私立短大で経験率が半数を超えて高くなる。

入学前に一週間以上外国で過ごしたことがある経験についても、経験率はいずれの大学・短大においても高くなく、関西国公立S・関西私立S・関西国公立がいずれも27%、北陸国公立21%、関西私立18%、北陸私立と関西私立短大14%となっている。外国に滞在した理由については、「旅行」と答えたケースが最も多く、続いて「語学研修」、「家族の海外勤務」「交換留学」「個人留学」の順になるが、旅行以外はほとんど1割に満たないごく少数の学生によって経験されている。いずれの大学・短大においても、大多数の学生は、中長期的な外国滞在経験を持たずに入学する点で共通しているといえる<sup>1</sup>。

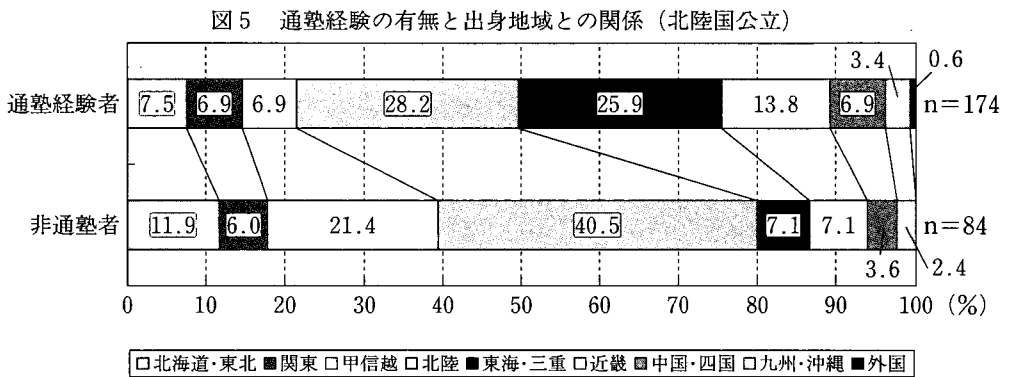
#### 4. 周辺層の学生における学習経験の多様性

前節で見たように学生の過去の学習経験に着目した場合、学校間の違いに関わらず、同質的な経験が共有されている状況を確認してきた。ここで非常に高い経験率が認められた、小学生低・高学年時の文化活動またはスポーツ教室と、中学生時の塾・予備校・家庭教師について、すべて経験したと答えた者の比率を示しておこう。上越教育大学の予備調査結果においては、ほぼ半数の49%の学生がこの種のタイプに属し、学生集団の主要なメインルートを作り出していたが、同じ比率は、関西国公立S42%、関西私立S48%、関西国公立65%、関西私立54%、北陸国公立44%、北陸私立34%、関西私立短大66%となる。北陸私立でやや比率が小さくなるが、どの大学でも3分の1以上、関西国公立と関西私立短大では約3分の2の学生が、同じ学習

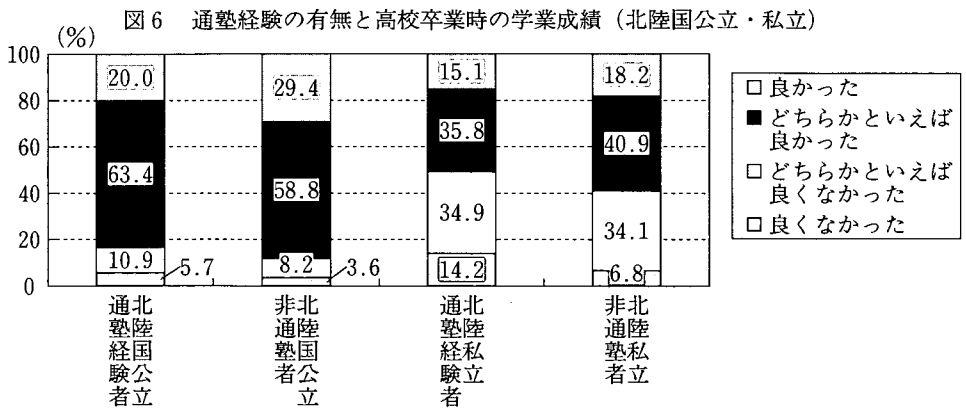
経験のパターンを辿っているのである。反対に、すべて経験していないと答えた者の比率は、関西国公立Sと関西私立Sが5%、関西国公立4%、関西私立2%、北陸国公立5%、北陸私立10%、関西私立短大3%であり、きわめて少数にすぎない。

そのような同質的なパターンをもつ学生が多数派を占める中で、学習経験の多様性に注目しようとするならば、メインルートから「はみ出た」経験を持つ学生に焦点を当てて分析することが有効であろう。そして、個別の例外的な学習経験を問題にする限りにおいて、その表れ方は、各大学・短大によって様々に異なってくると予想される。

先の集計結果において最も際立った例外を示しているのは、図4の塾・予備校・家庭教育経験に見られた、北陸の国公立・私立大学における未経験率の高さであろう。この非通塾層は、基本的に出身地域と結びついており、特に地元や近隣県以外から広く学生を集める北陸国公立の結果をみると、非通塾者が北陸・甲信越地方出身の学生に集中しており（合わせて非通塾者の62%を占める）、反対に東海・近畿・中国・四国地方の出身者は少ないことがわかる（図5）。



さらに、地元・近隣県出身者で多くを占める非通塾者は、高校卒業時の学業成績が「良かった」と答える傾向が高く、通塾経験者に比べてオーバー・アチーブメントであることがわかる（図6）。つまり、学校外の塾や予備校などに通わなかった場合、学校の成績が良かった者が大学に進学する傾向が高いと解釈することができる。



これらの結果は、北陸（および一般に地方）の大学においては、地元出身者を中心に、学校でよく勉強ができて、塾などに通うことなく大学に進学する学生が少なからず存在することを意味している。予備調査の上越教育大学のケースにおいても、塾通いや家庭教育の経験は多くないが、他の学生以上に勤勉な学習態度を示す「独学タイプ」の学生がいることを指摘したが、どの大学にも見られるメインルートの学習経験の背後には、地方の特性に根ざした多様性が見られることを、ここでは強調しておきたい。

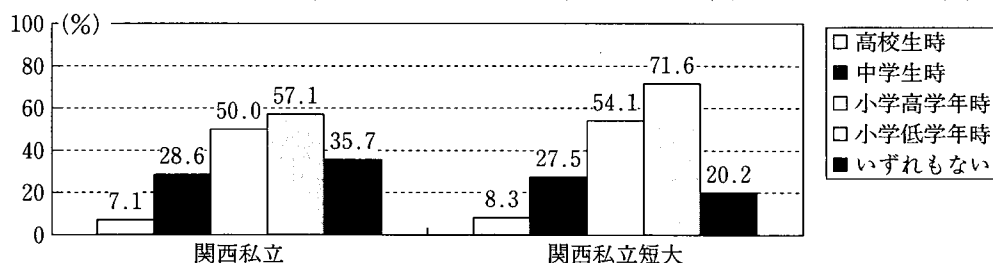
続いて、関西の大学と短大に目を転じてみよう。一般入試を原則とする国公立大学に対して、私立大学の場合は推薦入試による入学者が多いことに特徴がある。特に、最も競争的であるわけではない関西私立と関西私立短大においては、入学前のアルバイト経験に加えて、地域教育やボランティア活動の経験をしている者も見られた。表2は、これらの活動経験の有無を示したものである。関西私立・関西私立短大とも、両方の活動経験があると答えた者は16%ほどで、また両方ないと答えた比率は45%程度になっている。

表2 地域教育とボランティア活動の経験（関西私立・関西私立短大）

|        | 実数 (%)     |            |            |            |           |
|--------|------------|------------|------------|------------|-----------|
|        | 両方あり       | 地域のみ       | VTのみ       | 両方なし       | 合計        |
| 関西私立   | 28(16.6%)  | 36(21.3%)  | 28(16.6%)  | 77(45.6%)  | 169(100%) |
| 関西私立短大 | 109(16.4%) | 139(20.9%) | 121(18.2%) | 295(44.4%) | 664(100%) |

これらの活動経験を多く行っている者の特徴として何よりも挙げられるのは、家庭教育経験の豊富さである。彼・彼女たちは、親の職業・学歴面における社会階層的な偏りを有しているわけではない。しかし、2つの活動について、いずれか片方から、さらに両方を経験している者ほど、家庭教育経験の程度も高くなる。両方を経験した場合には、小学生時に半数以上が日常的に家庭教育を受けており、「いずれもない」と答えた者が、関西私立で36%、関西私立短大では20%になる（図7）<sup>2</sup>。どの大学・短大においても家庭教育が全般的に乏しい結果であった中で、これらの私立大学・短大で見出されたように、流行の言葉を用いれば、少数ながら「生きる力」や「社会力」（門脇、1999）を持った学生も出現していると考えてよいであろう。

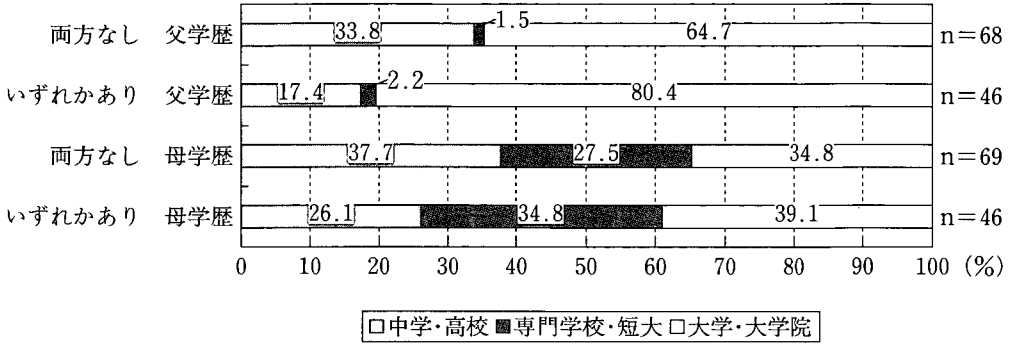
図7 地域教育・ボランティア活動経験者における家庭教育経験（関西私立・関西私立短大）



関西国公立においても、地域教育とボランティア活動の経験率は高くないものの（いずれか片方32%、両方9%）、これらの経験のある者は、家庭教育経験が豊富な傾向がある（片方・両

方合わせて高校生時4%, 中学生時11%, 小学高学年時40%, 小学低学年時64%, いずれもない28%, n=47)。ただし, 関西国公立の場合, これらの活動経験は親の学歴と関連しており, 活動経験があった学生の80%の父親が, 大学・大学院学歴となっている(図8)。一般入試に向けた受験勉強が求められるのに加えて, それとは直接関わりがないように見える活動にも従事するためには, 「文化資本」という意味での社会階層の影響があるのかもしれない。

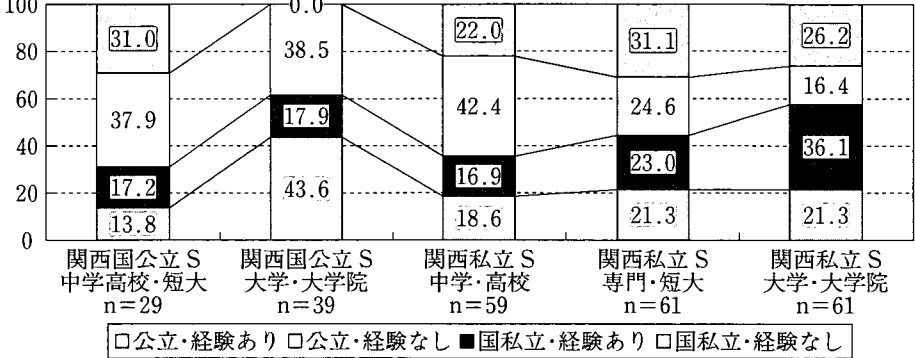
図8 地域教育・ボランティア活動経験別の親学歴(関西国公立)



その点に関して, 恵まれた社会階層出身の学生が多い最も競争的な大学において, 社会的出自の低い進学者の特徴を見とくことは重要であろう。ここではサンプル数の都合で指標を簡素化させるために, 母学歴の違いに注目してみたい。

関西国公立Sと関西私立Sの場合, 母学歴に代表される出身階層の違いは, 出身高校の設置者と密接な関わりがあり, 学歴が高いほど私立・国立高校出身が多く, 逆に低いほど公立出身者が多くなる。しかし, 地域教育およびボランティア活動経験との関わりをみると, 国公立大学と私立大学の間で様相が異なってくる。関西私立Sでは, 母学歴が高いほど, 国私立高校出身でこれらの経験をした者の比率が高くなるのに対し, 関西国公立Sでは, 国私立高校出身で経験のない者の比率が増大し, むしろ母学歴の低い学生のほうが活動経験は豊富になる(図9)。

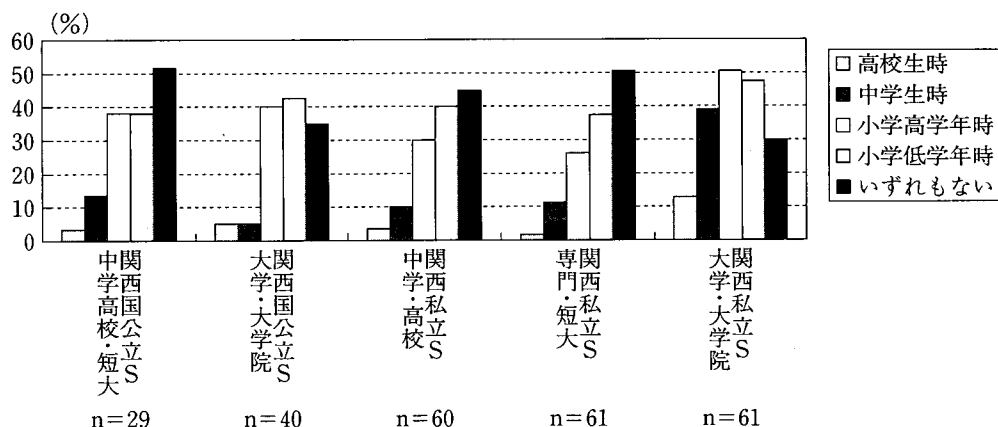
図9 母学歴別, 出身高校の設置者と地域教育・ボランティア活動経験(関西国公立S・関西私立S)



そのような学生の状況をふまえて, 母学歴別の家庭教育経験の違いを見てみると, 際立って

豊富な家庭教育を経験しているのは、関西私立Sにおける母学歴の高い学生であることがわかる－とはいえ「いずれもない」と答えた比率も30%にのぼる－(図10)。他方、関西国公立Sにおいては、母学歴による家庭教育経験の比率にそれほど大きな違いは認められない(母学歴が高い場合、「いずれもない」と答える比率は低くなるが、中学生時以降の経験率も極めて小さくなる)。言い換えれば、関西国公立Sの学生の多くは、母学歴の違いに関わらず、メインルートの学習経験のパターンに同化する戦略をとってきたと解釈することができる。同様のことは、関西私立Sにおける社会的出自の高くない学生にもあてはまる。

図10 母学歴別の家庭教育経験(関西国公立S・関西私立S)



もっとも関西私立Sでは、私立高校の出身者の中に、系列学校からの内部進学者が相当数含まれていると思われる(私立高校出身者のうち、推薦入試による進学者は50%—44名—を占める)。恵まれた出身家庭の条件に加えて、大学入試にあまり影響されない学校生活条件を有しているとすれば、そこから形成される「文化資本」の効果によって、メインルートのパターンからは卓越的に「逸脱」した学習経験が作り出されていると考えることができる。しかし、同様の効果が、同じく最も競争的な関西国公立Sの学生には、(サンプル数が少なかったことによる問題点も考慮に入れる必要があるが)量的に観察される結果が得られなかったことから、家庭より相続された「文化資本」を動員したポジティブな差異化を図ることができるのは、ごく一部の少数の学生層に限られるであろうと推測される。

以上の分析結果から、調査対象者である文科系学生に見られた学習経験の同質性、すなわち家庭教育の比重が小さく、小学生時に習いごとに通い、中学生時に塾通いをするというメインルートの経験とは異なる、いくつかの多様な側面について、量的に把握できる範囲内で明らかにしてきた。まず、北陸の地方大学においては、地元出身者を中心に塾などに通うことがなく、学校で良い成績をあげて進学する潜在能力の高い学生が少なからず存在する。次に、関西の私立大学・短大においては、家庭教育経験が豊富で、地域教育やボランティア活動の経験を持つタイプの学生層が見出された。さらに、関西の競争的な私立大学では、多くは恵まれた家庭の出身で私立の高校に通い、家庭教育や地域教育をはじめ、文化的にも豊富な学習経験を積んだ学生が見られる。これらの「特異な」学生たちはいずれも、メインルートの学習経験からすれば例外的で、一般化するに及ばない個別事例に映るかもしれない。しかし、調査対象となっ

たすべての大学・短大で共有されている同質的な「暗黙のルール」の背後には、個々の学校に置かれた社会的文脈に照らし合わせてみると、それぞれ異なる特色を持った学習経験の多様性が内包されているとも言えるのである。

## 5. 考 察

小論の分析では、基本的な単純集計とクロス集計（およびグラフによる図示）を用いながら、文科系高等教育進学者における学習経験の意味体系を探索する作業を行ってきた。その結果、上越教育大学における予備調査結果と同様に、多数派の学生を構成するメインルートの学習経験の同質性と、その周辺に個別大学・短大で見出された少数派の多様性という関係性があることが明らかになった。つまり、設置者別、地域別、社会階層別にみると、主に周辺層の学生において多様な学習経験のバリエーションが観察された。

この日本の学生における学習経験を構成する関係性は、ブルデューら（1964＝1997：103）がフランスで見出したような、ブルジョワ子弟の「ディレクタント」な自由教養と、学校を通じて文化を獲得した上昇志向的な「点取り虫」の対立関係に代表される、階級文化とその再生産という図式から得られるものとは様相を異にしている。その意味において、天野（1986）が指摘するように、西欧社会とは異なる日本の高等教育の構造的特質を反映したものであると考えることができよう。特に、どの大学・短大においても認められた家庭教育経験の相対的な比重の低さは、関西私立Sで見られたケースを除けば、出身階層との関わりがそれほど密接ではないことを表している。社会的出自の低い学生は、メインルートの学習経験に同化する形で高等教育に進学する傾向が見られるのであり、その点で多くの国民を受験競争に巻き込む「大衆教育社会」（苅谷，1995）のメカニズムが作動しているといえる。

文科系の高等教育をめぐる問題に関しては、小論の調査結果においても、関西国公立Sを除いて女性が過半数を占めていることのほか、文化活動経験率の高さや、地域教育やボランティア活動経験のある学生、関西私立Sにおける卓越した「文化資本」を保有する学生などの面に表れているかもしれない。広義の「文科系」の意味内容を探り入れた小論の分析結果は、伝統的な文学部のイメージとはほど遠い印象を与えたと思われるが、今日のマス化が進行した文科系高等教育の状況をふまえた上で、結果の解釈を企てる必要があると考える。

それでもなお、各大学・短大の社会的位置に応じて、学習経験の同質性／多様性という関係性の異なる表れ方が見出されたことは興味深い。そのような学校の社会的位置（設置者・地域性・学校間階層など）と、そこに所属する学生の社会的位置（性別・年齢・国籍・出身地域・卒業学校・所属階層など）によって、多様性のみられるところに様々な意味が付与されるとすれば、その総体として、ブルデュー（1979＝1989：178）が言うところの一つの社会的な空間を想定することができるだろう。それは、各人の社会的位置に応じた「資本」（経済的なもののみならず、文化的なものや人間関係も含めた社会生活の“元手”とでも言うべきもの）の量と構造に加えて、その時間的な変化を表す社会的軌道からなる三次元の空間であると定義されている。小論で取り上げた高等教育進学者の学習経験とは、そうした学生たちの社会的軌道の束として把握することができる。

社会的軌道という考え方を導入することで有用なのは、軌道の違いからなる関係性（ここではメインルートの同質的な学習経験を辿った者と、それとは異なる多様な学習経験を持つ者の

違いを思い起こせばよい)が、身体化され持続する文化的性向としてのハビトゥスの違いとして理解できることである<sup>3</sup>。つまり、社会的軌道の違いが、いわば身体で覚えてしまつた振舞いのセンスとなって、将来の実践を方向づけていく原動力になるということである(たとえば「あの人は要領がよい」「真面目で粘り強い」「自信に満ちている」という表現が用いられるように)。そのような観点から、小論で分析した学習経験の意味体系を捉え直してみると、それは文科系の高等教育進学者における象徴的な勢力関係を体现する、学生生活条件の問題として立ち上がってくる。たとえば、現在推し進められている大学改革は、多数派のメインルートの学生に適合しているのか、「特異な」少数派の経験を積んだ学生を伸ばしていくのか、それともその芽を摘んでしまう方向に働くのか、そうした問題意識に基づいた分析を行うことが可能になってくると考える。

今回探索した学習経験の同質性／多様性という関係性からなる意味体系の下で、今後の課題として、より具体的な問題群を想定した仮説モデルを立てて分析を試みる必要がある。

## 注

- 1 それに対して、予備調査を実施したフランスの2大学の結果においては、外国滞在経験を持つ学生の比率がきわめて高く、ルーアン大学で93%、パリ第8大学で77%にものぼる。また、滞在理由を見ると、日本と同様に「旅行」が多いものの(ルーアン大学65%、パリ第8大学71%)、特にルーアン大学では「交換留学」による滞在経験を持つ者が多い(68%、パリ第8は25%)。ヨーロッパ大陸の中に位置するフランスでは、制度化された外国滞在機会が豊富に用意されている点に特徴があるといえる。
- 2 ちなみにこの結果は、フランスの2大学における家庭教育経験の分布と類似している。
- 3 ハビトゥスは、「持続性をもち移調が可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造」と定義される(ブルデュー, 1980=1988: 83)。

## 附 記

小論は、2001-2002年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究B)による研究成果の一部である。調査実施にご協力いただいた各大学・短大の先生方、および学生の皆様にお礼を申し上げます。

## 文 献

- 天野郁夫, 1986, 『高等教育の日本的構造』, 玉川大学出版部。  
 ブルデュー, P., 1979=1989, 石井洋二郎訳, 『ディスタンクシオン I - 社会的判断力批判 -』, 新評論(藤原書店)。  
 ブルデュー, P., 1980=1988, 今村仁司・港道隆訳, 『実践感覚 I』, みすず書房。  
 ブルデュー, P., パスロン, J.-C., 1964=1997, 石井洋二郎監訳, 『遺産相続者たち - 学生と文化 -』, 藤原書店。

- Grignon, C. (dir.), 2000, *Les conditions de vie des étudiants: Enquête OVE*, Presses Universitaires de France.
- 橋本鉦市, 1996, 「近代日本における『文学部』の機能と構造－帝国大学文学部を中心として－」, 『教育社会学研究』第59集, pp.91-107.
- 橋本鉦市, 1997, 「データから見た文学部－戦後における構造と変容－」, 『IDE 現代の高等教育』第390号, pp.53-59.
- 岩田弘三, 1999, 「学生文化形成についての大学間比較に関する研究」, 『学生文化の実態, 機能に関する実証的研究』, 平成8～10年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書(研究代表者: 武内清), pp.14-29.
- 門脇厚司, 1999, 『子どもの社会力』, 岩波新書.
- 荻谷剛彦, 1995, 『大衆教育社会のゆくえ－学歴主義と平等主義の戦後史－』, 中公新書.
- 大前敦巳, 2002, 「上越教育大学生の学習経歴と学生生活－日仏比較に向けた質問紙調査の問題点と課題－」, 『上越教育大学研究紀要』第22巻第1号, pp.201-215.
- 竹内洋, 1999, 『日本の近代12 学歴貴族の栄光と挫折』, 中央公論新社.
- 保田卓, 2002, 「教養の行方－『京都大学1回生調査』結果を用いた学部による大学生の文化的差異の分析より－」, 『大衆教育時代におけるエリート中等学校の学校文化と人間形成に関する比較研究』, 平成11～13年度文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書(研究代表者: 竹内洋), pp.155-166.

# Homogeneity and Variety of Learning Experiences of Higher Education Students

—— An Exploratory Analysis of Humanity Students in  
Kansai and Hokuriku Districts ——

Atsumi OMAE\*

## ABSTRACT

In this paper, we explored a system of signification of learning experiences which humanity students answered in the questionnaire survey research at 6 universities and 1 junior college in Kansai and Hokuriku districts. We observed the principal pattern of experiences that family education was relatively low, extra-school activities grew prosperous at the time of elementary school, and many students attended juku-school after the entrance of junior high school. Around this homogeneity of leaning pattern, we also found the variety of social trajectories according to the institutions, areas and social origins. It follows from the homogeneity/ variety relation that cultural disposition of habitus is formed as social conditions of student life in Japan.

---

\* Division of School Guidance and School Administration